提出日　平成 26 年 3 月 31 日

平成25年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 （該当に○）	海外共同　・　共同研究　・　個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	伊藤まゆみ 看護学部　教授	
研究課題名	終末期ケア実習における看護学生の心的衝撃への心理教育的支援に関する研究 副題：終末期ケア看護師用ケア意味づけ尺度並びにケア効力感尺度の開発	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
石渡智恵美	看護学部・助教	調査の実施
細野　知子	看護学部・助手	調査の実施・会計
菊地きよ美	看護学部・助手	調査の実施・物品調達
大場　良子	埼玉県立大学・講師	研究計画・実施・データ解析・執筆
金子多喜子	東京工科大学・助教	研究計画・実施・データ解析・執筆
研究期間	平成２５年４月１日　～　平成２６年３月３１日	

海外共同研究を実施することになった経緯（海外共同のみ）

研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書

図書

「看護に活かすカウンセリングⅠ　―コミュニケーション・スキル―」　ナカニシヤ出版　印刷中

理論編

第１章　対象の生き方を尊重した健康支援のための基礎的技能（伊藤まゆみ）

第２章　コミュニケーション・スキルとは何か（伊藤まゆみ）

第３章　対人コミュニケーションに関する基礎的な知識（伊藤まゆみ）

実践編

第５章　人間関係を築くための基礎的なコミュニケーション・スキル

　第１節　看護ケアにおけるコミュニケーションの目標（伊藤まゆみ）

　第２節　看護ケアにおけるコミュニケーションの特徴（伊藤まゆみ）

　第３節　人間関係を築くうえでの前提

　　1. 自己理解と他者理解（伊藤まゆみ），　2. 自己開示（伊藤まゆみ）

　　3. 知覚の影響を知る（金子多喜子），　4. コミュニケーションの注意点（金子多喜子）

第６章　さまざまな看護場面におけるコミュニケーション・スキル

　第１節　終末期ケア（伊藤まゆみ）

　第４節　がん看護（大場良子）

第７章　コミュニケーション・スキルの学び方（伊藤まゆみ）

研究実績の概要（１）

今年度は次の２研究を行った。

研究１：終末期がん患者ケアにおける困難や苦悩に対する看護師の意味づけや効力感の様相

【目的】

本研究は，終末期ケア看護師用ケアの意味づけ尺度並びにケア効力感尺度の開発を行うための基礎的資料として，終末期がん患者ケアにおける困難や苦悩に対する看護師の意味づけや効力感の様相を，彼らのケア体験への対処過程から質的に検討することを目的とした。

【方法】

調査は，関東近県で終末期がん患者ケアに携わる看護師を対象に，平成 25 年 6 月から平成 26 年 8 月まで実施した。調査内容は，(1)対象の属性（性別，年齢，看護経験年数，終末期がん患者に関わった年数，現在の勤務状況など），(2) 終末期がん患者のケア体験（終末期がん患者のケアにおける看護師の①ケアに対する困難やその対処，②そのケアに対して意味を見出したり，なんとかケアができるという感覚を得たりした体験）である。

調査の手続きは，①調査対象が所属する組織を通して調査を依頼する，②調査対象には書面と口頭で調査の目的，内容，方法，倫理的配慮，データの公表などについて説明し，調査の同意を得る，③調査は，プライバシーが保護できる個室で半構造化面接を行い，データを収集する，④面接内容は，調査対象の許可を得て IC レコーダーに録音し，逐語記録としてテキスト化する，⑤面接時間は 60 分程度とする，である。

【結果】

本学の研究倫理審査委員会の承認を得て，調査を実施した。調査数は，21 名（男性 1 名，女性 20 名），平均年齢 39.4 歳（レンジ 29-53 歳），がん看護経験年数 8.3 年（レンジ 2-17 年），平均面接時間 64.6 分（レンジ 41-82 分）であった。得られたデータは，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下，2007)を用いて分析中である。

研究２：終末期ケア看護師用ケアの意味づけ尺度並びにケア効力感尺度の開発

【目的】

本研究は，終末期がん患者ケアにおける困難や苦悩に対する看護師の意味づけや効力感の様相の検討結果と文献検討により，終末期ケア看護師用ケアの意味づけ尺度並びにケア効力感尺度を開発することを目的とした。

【方法】

まず，研究 1 の面接内容と文献的検討により終末期ケア看護師のストレスフルな体験に対する意味づけの測定概念と質問項目を検討し，意味づけ尺度の質問紙を作成した。また，同様に終末期ケア看護師のケア効力感の測定概念と質問項目を検討し，終末期ケア効力感の質問紙を作成した。各尺度の内容的妥当性は，心理系大学院教員 2 名，看護系大学教員 3 名で協議し，確認した。予備的調査を看護師 10 名に行い，質問項目の文言の一部修正し，最終的な質問紙を作成した。開発された尺度の基準関連妥当性を確認するために，これまで心理学領域で作成された意味づけ尺度，ストレスコーピング尺度，特性自己協力感尺度を合わせて測定することとした。尺度の信頼性を確認するために調査は同一調査対象に初回調査から 2 週間以上の間隔を空けて行う再テスト法とした。

調査は，平成 25 年 12 月に全国の終末期ケアに携わる看護師（59 施設，759 名）に配布した。

研究実績の概要（２）

【結果】

調査の回収数は，448 名（回収 39 施設，回収率 59.0%），有効回答 375 名（回収に対する有効回答率 83.7%）であった。全てのデータを入力し，現在は項目分析，最尤法プロマックス回転による因子分析を繰り返し，探索的因子分析を行っている。今後は得られた因子によるモデルを作成し，確認的因子分析を行う予定である。